

難波西鶴と 海の道

【8】

森田 雅也

第2回で西鶴のころは「海の道」で大坂と松前(北海道)が結ばれていたため、情報も入りやすかったということを書きました。

西鶴の『武道伝来記』(貞享4(1687)年刊)巻二の四「命とらるる人魚の海」も松前の話です。

西鶴はその話の冒頭で、奥羽の海には珍しい魚がとれることが多

いのだと前置きして、宝治元(1247)年

3月20日に津軽の大浦に初めて人魚が流れ着いたとして、その形容の説明をします。

頭には紅の鶏冠があつて、顔は美女のよう、四つ足があつて、「る

りをのべて」とありま

す。手足は寶石の瑠璃を伸ばしたようという意味でしょうか、ガラ

各国に残る人魚伝説

さらさらうろこは金色に輝き、身体は良い匂いが香り深く、声は雲雀笛(ヒバリの鳴き声)のような音色を出す笛のこと、静かなきれいな調子であったと伝えられているとします。日本の人魚はとも素晴らしいマーマイドだったのです。この話は単なる伝承ではなく、『本朝年代記』という江戸時代に刊行された歴史記録書にも記されていますが、他にも『聖徳太子伝』『日本書紀』『古今著聞集』など数々の記録と伝承があります。デンマークのアンデルセン童話の人魚は有名ですが、海洋国家の国々には、あまねく

人魚伝説というものがあつたのです。『日本大百科全書』によれば、「人魚」はフランスではシレーヌ、イタリアではシレーナと呼ばれているのですが、いずれもギリシャ神話のセイレン(上半身人間、下半身鳥の怪物)からきたものだそうです。イギリスではマーメイド(女性)、マーマン(男性)と男女別の呼び名を持つていているとのこと。中国の場合は『山海經』という書物に、人魚は形がナマズに似て四つ足で、人間の赤子のような声で鳴くと記されています。若狭には八百比丘尼伝説が

複数残りますが、人魚を食べたことよって800年の寿命を得た比丘尼、尼僧の伝説です。

この伝説などによつて、人魚を食べると若さが衰えないという言い伝えとなったことは、『西鶴撰留』などにも載りますが、逆に人魚という霊力の高い神に近いものを食すとその罰として、800年死ねなくなるという解釈も成り立ちます。たとえ、不老不死のまま800年生きてても悲しさが増すばかりかも知れませんね。「人魚」話は次回も続きます。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

「海の道」から人魚も来た?